



諦めるのは  
まだ早い



mkmoon

## 諦めるのはまだ早い

---

熱を出して布団に寝転がり、部屋に入ってくる太陽光に浮かび上がるチリを眺めながら、あー、今日の給食はなんだったっけとか考えていた私の子供時代には携帯用ゲーム機なんて存在しなかった。

枕元に漫画本を積み上げここぞとばかりに読んでいてもそれが2日、3日と続けばさすがに読み飽きて、やがてぼーっと天井を眺めるだけの時間が訪れる。暇だ。

元々文字を読むのが嫌いではなかった私に母はよく本を買ってくれたが、母の選択する本は伝記だったり、名作文学だったり、なんとというか、等身大の私より背伸びをした本を本人の意思に関係なく買ってくるものだから読まれずにほこりをかぶったままの本もそれなりに存在した。それらの埃っぽい本達は普段は肩身狭そうに本棚の一番端の方に鎮座しているだけなのだが、娯楽もない、動くこともままならない、まさに「病気で暇」と天井をみて呆けている自分に存在を思い出させるかの様に語りかけてくるのだ。きっと今なら読めるぞ！と。

なので私が伝記や名作文学を自らすすんで読むのは大抵熱を出している時だった。今思えば何故熱を出しているときにわざわざ余計熱が上がりそうな本を読んでいたのかと苦笑せずにはられない。

細かい文字ばかりの本は小難しく大抵の本は一度読んだらもう二度と読まなかった。

あらら。冒頭に「元々文字を読むのが嫌いではなかった」って書いてあるのは何なんだろう。だけど、そんな私でも発熱時専用本として何度か読んだ本がある。

「ヘレン・ケラー」だ。

子供用にしては分厚い本で最初と最後の方に上質のつるつとした紙でヘレンの写真が何枚も載っている本だった。3重苦を背負いながらも大学にまで進み優秀な成績を取めたヘレンには子供ながら尊敬の意を感じたのを覚えている。3重苦とはどんな感じだったんだろうと、ティッシュで耳栓をし、更に両耳を押さえて目をつぶって部屋の中をうろうろ歩いてみたりしたことも今思い出した。

熱出してるんだからそんな事してないで大人しく寝てなさい、自分。

あー。なんだか懐かしいな。

さて、そんなヘレン・ケラーの文面が最近よく頭によみがえってくる。どんな時か？

一番多いのは息子に勉強を教えている時だ。分からない！できない！と癩癩を起こす息子の姿を見ているとヘレンとサリバン先生との闘いが思いかぶさるのである。ああ。サリバン女史のなんと忍耐強かったことよ！諦めず、強く、慈悲深く、そしてとうとう闇の中で生きていた少女に一筋の光を与えたのだ。

片や私と言えば。わからずやのこんこんちきのぽんぽこぴーの息子とほんの数時間対峙しただけでぐったりと疲労困憊してしまう情けなさ。ああ。彼女ならどうする！？気がつくとも問自答しているのである。そしていつも同じ結論にたどり着くのだ。

たかがこれしき、諦めるのはまだ早い。と。

ヘレンの自伝を読んでサリバンを主人公に捻じ曲げて読んでしまう自分も可笑しいが、サリバンの目からみればサリバンは当たり前のように主人公なのである。

そう、小学生の息子にキリキリしている自分だって然り。勉強を例に書いたけれど、もちろん、仕事だったり、意思の疎通だったり、何かを伝えるという技術はとても難しい。それ故にヘレンやサリバンの諦めない姿勢やたゆまぬ努力を想像しては励まされたり奮起させられたりするるのである。

光は「諦めない」という小さな一歩先にあると信じて。